

巡礼者イニゴ

聖イグナチオ・デ・ロヨラの劇的な生涯の劇

鹽野 めぐみ

11

第三幕 第2場

1521年秋

ロヨラ城イニゴの病室

登場人物： 騎士 イニゴ・デ・ロヨラ
 城主夫人 マグダレーナ・デ・ロヨラ（イニゴの義姉）

イニゴ：目覚めたと言え、本当に目が覚めてきたのかもしれない。内心に注意してみると、何か新しい世界が心の中に広がってきたようにも感じる。騎士物語の世界のなかに、聖人たちの世界がすこしずつ入り込み、日に日に勢力を伸ばしつつあるとでもいうべきか？
（ノックする音）

イニゴ：ハイッ、どーぞ。（マグダレーナが扉を開け、入ってくる。）

マグダレーナ：晩ご飯をもってきました。もう明かりをつけましょうね。日が暮れるのが早くなってきたこと。

イニゴ：毎日毎日、三度の食事をありがとう。おかげで体の方は、足を除けばすっかり良くなってきたけど、そうなるも毎日が無駄に過ぎてゆくような気がして、むなしくなります。早く治って、何かしないと！

マグダレーナ：焦りは禁物よ。健康になりさえすれば、あなたなら何でもできますからね。

イニゴ：何でもと言っても、これから何をすればいいのかがよくわからないのです。前は、強い騎士になって名声を博することが生きがだったのですが、この頃は、本当にそれでいいのか、それだけが生まれてきた目的のすべてか、と考えこむこともあります。手柄を立てて、国中の人からほめそやされ、美しい妻を娶り、ひと財産築いても、いつかみんな年取って死ぬんだし、そうなれば何一つ死後の世界には持っていけないのですから、お金も名誉もむなしいですよ。姉さんが貸してくれた本の影響もあるかもしれません。

マグダレーナ：ほんとうにそうね！若い時のあなたは、きらびやかでカッコよかったけれど、あまり深く考えることなく行動するので、見ていてハラハラすることもありました。近頃は考え深い大人になってきましたね。地上のことだけでなく、神様のことをもっと考えてほしいと思って前から祈っていたのよ。あの本が役に立って本当に良かった。

イニゴ：姉さんは、私が小さいころ お母さんのように面倒を見てくれましたが、私の心のことまで考えてくださったのですね？ デ・クェヤール公の宮廷で小姓として仕えていた時や、戦場にいたときには、ご婦人の機嫌を取ったり、手柄を立てたりすることにばかりに心を奪われていたけど、人生の究極的な目的や神のことなどについては、あまり深く考えることがありませんでした。パンプローナ城で明日は決戦という日には、さすがに死を覚悟して、真剣に祈りましたが。

マグダレーナ：傷を負って帰ってきてからも、初めは騎士の名誉のことばかり考えていましたね？でも、この半年の間にずいぶん変わってきました。お兄様も感づいているようですよ。

イニゴ：そうですか。ブルゴスに行くことになった召使に、厳律カルトゥジオ会の規則を調べてもらったりしたからでしょう。

マグダレーナ：修道生活を考えているの？

イニゴ：これまで神をないがしろにする生活を送っていたので、その償いに、まずエルサレム巡礼をしたいと考えているんです。そのあとのことはまだはっきりしないのですが、一生苦行の生活を送るために、セビリヤの厳律カルトゥジオ会の大修道院に入ったらどうかと考えたりしています。

【黒い使いの合唱】

♪イニゴよイニゴ 狂ったのか？ おまえみたいな罪びとが
よりもよって修道士？ 開いた口が塞がらねー

修道院に入るとは お棺に入るようなもの
若いお前の眼前に 薔薇色の世が 開けてる

遠く異国に 目を向けよ 遙か彼方の ジパングで
大伴旅人という人が 賢いうたを 詠んでいる

この世にし 楽しくあらば

来む世には 虫にも鳥にも 我はなりなむ

(この世で酒さえ飲んで楽しかったら あの世では 虫にでも鳥にでも 私はなってしまう)

大伴旅人 酒をほむる歌より

『万葉集』巻三 (348)

【白衣の天使の合唱】

♪ああイニゴ 良くわきまえよ 人の世の はかなきことを

ひたすらに 求めもとめよ 神の世の 永遠のいのちを

祇園精舎の鐘の声 諸行無常の響きあり

沙羅双樹の花の色 盛者必衰の理を表す 『平家物語』巻頭